

当科はこれまでの旧第2内科から独立して単独の診療科として生まれ変わりました。呼吸器内科では、肺癌、感染症、COPD、喘息、間質性肺炎、ARDSなど、腫瘍、感染、アレルギーといった多岐に渡る疾患領域をカバーし、また急性期から慢性期まで幅広い領域の診療に従事しています。特に肺癌における最近の治療の進歩は目覚ましく、遺伝子異常などを踏まえた上でのいわゆるプレジジョンメディシンの実践を行っています。肺癌治療の3本柱である薬物治療、外科治療、放射線治療に免疫治療を加えた集学的治療が行える施設は山梨県では限られており、当科では肺癌患者さんに対する最適な治療を学ぶことができます。また、山梨県には呼吸器の専門医が少ないため、癌以外の間質性肺炎、難治性喘息、治療抵抗性の感染症や稀少な呼吸器疾患など、一般病院では診断や治療が困難な呼吸器疾患も多数紹介されてきます。このような疾患の患者さんの診療を通して基本的な診療技能を習得し、さらに一歩進んだ最新の関連知識を身につけることにより、呼吸器疾患や呼吸器症状へのプライマリーな対応と最新かつ適切な治療ができることを目指します。

プログラムの概要

将来の専門性に関わらず、臨床医としての基本的な診療能力を身につけるという卒後臨床研修の目的に沿って、当科の研修では基本的に頻度の高い呼吸器疾患の診療に携わっていただきます。主な研修の場となる病棟では肺癌患者さんが多数を占めており、肺癌の最新の医療を学ぶことができますが、一方、肺癌はCOPDや間質性肺炎など様々な肺疾患を背景に発症し、また、合併症として感染症や気胸、胸水貯留など様々な呼吸器病態を併発しますので、多彩な肺疾患や病態を同時に経験することができます。

アピールポイント

1. 頻度の高い呼吸器疾患や呼吸器系の症状への対処法を身につけることができます。
呼吸器疾患は頻度が高いため、将来どの診療科を専門としても、また、当直業務の中で、呼吸器疾患や呼吸器系の症状には日常的に遭遇することになります。その時にある程度の対応を自ら行い、また、適切なタイミングで専門医にコンサルトできるような能力を当科での研修で習得します。大学病院の入院患者さんは肺癌やその他希少あるいは重症の疾患の方が多くを占めていますが、このような患者さんへの対処法を知ることにより、よりコモンな疾患に対処できるようになります。
2. 肺癌の治療を通して固形癌の最新の診療の考え方を学ぶことができます。
固形癌の治療において分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤などの薬物治療は留まることなく進歩しています。当科では遺伝子異常や免疫の状態に応じて治療法を選択するというプレジジョンメディシンを通して、固形癌診療の大きな流れを肺癌を通して学ぶことができます。
3. 呼吸器疾患の診断、治療からターミナルケアまでの流れを学ぶことができます。
4~8週間という短い研修期間では一人の患者さんの診断から治療、ターミナルケアまでを一貫して体験することはできませんが、様々な段階の患者さんを診ることにより、呼吸器疾患の診療の全体像を体感することができます。癌や感染症といった横断的な考えだけではなく呼吸器という臓器に特異的な考え方も習得できます。予後不良の患者さんの生き様や社会的背景まで視野に入れ、患者さんを一人の人間としてみるという視点も習得できます。
4. 呼吸器感染症の治療を通じて、感染症一般に対する診療能力を高めることができます。
感染症を起こすのは呼吸器に限りませんが、呼吸器は感染症を起こす頻度が高い臓器です。呼吸器感染症の対処法を知ることを手掛かりに、感染症一般に対する考えを習得することができます。
5. 呼吸不全の診断や対処法を学ぶことができます。
呼吸器疾患では様々な原因により呼吸不全を認めることがあり、慢性の経過を呈する慢性呼吸不全から急激な経過を辿る急性呼吸不全まで多岐に渡りますが、その診断と対処法を習得することができます。



具体的な研修内容

2つある診療チームのいずれかに属して、主に入院患者さんの診療にあたります。各診療チームはそれぞれ15人前後の入院患者さんを担当しています。胸部レントゲン、CT、PETなどの画像検査の読影、呼吸機能検査、血液ガス分析の結果解釈、ベッドサイドでの検査や処置などは指導医のもとで行います。気管支鏡検査、局所麻酔下胸腔鏡検査などにも参加し、検査の概要を理解します。

また、診療チームや診療科全体での、あるいは他科との合同カンファレンスを通して、患者さんの診断や治療方針についての基本的な考え方を習得します。